Reflection on Mt. Tai as Sacred Mountain

Takeshi Kimura

Based upon my field trips to Mt. Tai located in Shandong Province, China, I attempt to reflect on Mt. Tai as a sacred mountain as it appears today. Any visitor to Mt. Tai cannot fail to notice that this sacred mountain is becoming a site for tourism, and commercialization has been going on. Yet, there are still sincere devotees visiting and climbing this mountain, being mingled with many "secular" tourists. Historically archaeological drawings from the patrilineal society show that there was religious adoration of the sacred mountain in conjunction with sun worship. There was also a notion of the sacred mountain as a location where souls of the dead entered into the otherworld. Considering the long religious history of this sacred mountain, it is necessary to avoid making any hasty criticism about "secularization" of this sacred mountain by criticizing ones own romantic idealization of past visitors to this mountain. In addition, under the apparent "tourism" and "commercialization," there are still deep and sincere religious devotions to and worships of the sacred mountain deities. It is absolutely necessary to examine and understand this religious aspect seen on Mt. Tai, while analyzing tourism on and commercialization of this mountain.

聖なる山としての泰山についての思索

木　村　武　史

初めに

筆者の今までの研究領域は北米を初めとする諸先住民の宗教と日本の宗教である。そのため、研究領域の違う中国の宗教について何かしらのことを書くということに関して初めは躊躇したが、折角、平成12年度から13年度の過去二年間、科学研究費補助金を得て中国泰山に二度赴く機会を与えられたので、素人なりに思ったことを書いておくことにした。専門家から見るならば、書くほどのことでもないと思われるかもしれないが、恥を忍んで書くことにした。一体、どのような経緯で中国泰山について調べることになったのか、その成り立ちをまず述べておきたい。

当時勤めていた山口大学人文学部の同僚と、平成10年度から平成12年度までの三年間、科学研究費補助金による共同研究「日本思想史における『浄』と『穢』」を行った。この研究における筆者の課題は、聖なる山としての高野山について考察をすることであった。この課題のための研究を行い、「聖なる山」について考えている最中、日本の聖なる山を考えるためには、日本宗教史が中国宗教史の影響を受けているところから、日本の聖なる山を東アジア一帯に位置づける必要があるのではと考えた。日本では日本研究と中国研究は全く異なる研究領域に区分されるが、アメリカで宗教学の教育を受けた時には、中国と日本は東アジアとして包括されていた。そして、しばしば、大学の授業では中国研究者は同時に日本についても教え、日本研究者は中国についても教えるということを見聞きしていたせいか、日本の聖なる山の研究から中国の聖なる山の研究へと視点を移すことには、それほど違和感を感じなかった。

そこで、平成11年度に共同研究の研究テーマの延長として「東アジアにおける聖なる山の研究」という研究計画を立て、科学研究費補助金に申請を行った。若手研究奨励ということもあったのであろう、研究計画書が通り、補助金をもらえることになった。こうして平成12年度から平成13年度にかけて二年間、中国山東省にある東嶽である泰山を取り上げて研究を行うことになった。平成12年７月と13年９月の二回、現地に赴き泰山に登拝し、調査を行った。現地に赴

いての調査といっても、それは人類学的な意味でのフィールドワークからはほど遠い。中国研究者からするならば、「観光」に近いと思われるかもしれない。しかし、筆者の関心は「聖なる山」としての泰山にあり、「聖なる山」とは一体何なのか、という問題にある。それゆえ、この問題を考えるために泰山に登拝したという方が正しいかもしれない。

聖なる山としての泰山は複雑である。泰山を訪れた際に、中国人の研究者に会い、話を聞く機会があった。泰山はその研究に人生を捧げている研究者がいるほどの長い歴史と意義を持った聖なる山である。*1 実際、先史時代から現代まで八千年以上に渡って複雑な意義を持ってきた山である。筆者のように二度ほど登拝しただけで何かを書けるような山ではないことは確かである。しかしながら、何かを書いて残しておかないと、忘却の彼方に沈んでしまう可能性があり、それでは折角の登拝が無駄になってしまうと思い、「考察」ではなく、「思索」として書くことにした。聖なる山としての泰山について考えながら登拝して気づいたのは、聖なる山としての泰山には、「自然」が作り出す景観や人工物である建築物ならびに石刻などが構成する美的な様相があり、それらが泰山の重要な特徴になっているという点である。*2 しかも、それらが「歴史的」な蓄積を経て作り出されており、しかも、泰山はそのようなものとして強調されているという点である。本論では、このような特徴付けが聖なる山としての泰山にどのような意義を与えているのかについて主に考えてみたい。また、今日のように観光化されても、なぜ人々が訪れるのか、聖なる空間を構成する重要な要素としての「巡礼」あるいは「旅」という行為を通して「聖」と「俗」の交差について考えてみたい。

第一節　「泰」山の図象と「泰」の字

泰山は中国山東省に位置する五嶽の筆頭の東嶽であり、華山とならんで中国を代表する聖なる山である。この山東省地域は古代の漢民族の文化が芽生えたところであり、孔子の生まれ故郷である曲阜も泰山の近くにある。多くの中国人泰山研究者が主張しているように、この地域は「斉州」と呼ばれていた。「斉」とは中を意味し、それゆえ、この地域は中原として意識されていた。中原は古代中国の精神的中心であり、それゆえ「中国」と称されるようになる。この古代中国の精神が生まれた地域一帯の唯一の最高峰が泰山である。*3

泰山には複数のイメージがある。例えば、政治的に言うならば、秦の始皇帝が封禅の儀式を行った山であり、後には「真」の皇帝だけが泰山で封禅の儀式

を行えた国家祭祀の山である。また、中国の一般民衆は、人が死んだ後、魂が戻る山が泰山であると考えている。特定の宗教集団との結びつきで言うならば、かつては仏教が泰山に入っていた時は、地獄との関連で泰山は受け止められていた。今日では道教の山であり、娘娘信仰と深く結びつきがある。このように歴史を通じてみると、泰山を巡っては神観が変容しており、それ自体が興味深い宗教史的考察の対象である。また、美術史的に言うならば、泰山には多くの石刻が残されており、書道史の上からも重視されている。建築史の上からも天貺殿は孔子廟、北京の紫禁城とならんで三大宮殿の一つとされている。このように人間の行為という意味での歴史との観点では、聖なる山としての泰山は多層的な歴史の記憶とともに受け止められている。この記憶の重層性が「聖なる山」としての泰山の重要な一面を形成していることは確かである。

ところが、興味深い点は、歴史的に文字を通じて蓄積されてきた記憶だけではなく、先史時代からこの地域一帯にとって泰山は重要な山であったことが、泰山近郊で発見された大汶口遺跡で出土した陶器に描かれている図から伺える。（図１）大汶口遺跡は先史時代の母系社会から父系社会への移行段階を表しているとされる。この図が何を表しているのかははっきりしない。しかし、上が太陽で下が山であることは明らかなようである。大汶口遺跡が発見された周囲にある山は泰山だけである。それゆえ、この図の山を泰山として考えてもよいと思われる。そして、ここで興味深いのは、山の上に太陽が位置しているという構図である。これが登ってきた太陽が山の上に現れたところを表しているのか、単に太陽と山を結びつけるという図柄上、このような構図になったのかは明らかではないが、太陽が現れ、山の形が明瞭に捉えられているところから、これは昼間の太陽と山の図であると考えてもよいであろう。そして、両者の間にあるものが雲か煙かははっきりしないが、刘慧によれば、この図は、後の商代にあったとされる高い山の上で炎を燃やす儀式から推測して、高山の上で炎を焚いて行った祭祀を描いている可能性がある。*4 この解釈方法が正しいかどうかは別にして、もし高山で炎を焚いて出た煙を示しているとしたら、先史時代に人々が泰山に登って炎を焚いていたことを示す。

この図に関する、靳之林の解釈を参考してみよう。靳はこの図を通天・通天符号であるとし、もし、この図を霊山と解釈する場合、それは霊山崇拝、太陽崇拝、樹木崇拝（扶桑崇拝）と併せて一つにしたものであると考えている。真ん中の弓なりになった図は「上に向かう通天符号であり」、上部の○は最高の天である太陽の天の観念を表している。*5 太陽崇拝は大汶口文化の早期から見

られ、それは八角十字太陽文などに見られる。（図２）そして、太陽を象徴する円形符号は男陽を象徴する圭且（けいしょ）と通ずるという。「父系社会では、これ（圭）は陽性の通天・通神符号で、葬送に用いて死者の霊魂が天・神に通じ、生命は栄生を得るとされた。」[*6] 更に、この圭の図は樹木の符号と一致するという。また、大汶口遺跡出土の壺の文様には女陰を象徴する符号も記されている。この符号そのものは、先に挙げた文様には出てこないが、大汶口文化では男陽と女陰とをコスモロジカルに区別し、結びつけていたと言っても良いであろう。ここで興味深いのは、靳がこれらの図象が葬送儀礼と関係していると強調している点である。それゆえ、ここでは死と生と再生が関連づけられていると言っても良いであろう。

ここで若干時代は下るが、「泰」の字の意味について考察してみよう。泰山は古くは「岱山」や「岱宗」とも呼ばれていたので、必ずしも「泰」の字からのみ、その意義を考えることはできないが、取り敢えず、「泰」の字について考えてみよう。

『大漢和大辞典』によれば、この字の解字は次のように説明されている。「大と廾（両手）と水との合字。手で水を掬えばさへぎる所なく洩れ落ちることに義を取ってなめらかの意を表はし、大は音を表す。古文は大と二との合字。二は厶で滑の意味をあらし、大は音は表す。」[*7] つまり「泰」は水偏の字であることが分かる。

そして「泰」の字義が幾つか挙げられている。[*8] これらの意味の中で興味深いのは、「泰」の字が「太」や「大」と同じ意味を持ち、しかも「大極」の意を持つという点である。[*9] また、『大漢和大辞典』には泰山にまつわる他の語句が掲載されている。[*10] これらの興味深い側面は主に四点に纏められるであろう。第一は、「天子」が封禅を行なう聖山。第二は、人が死んでからその魂魄が帰る山。第三は、始源に関わる。第四に、天地の気を司る獣神が泰の字を持つ。

では、次に『大漢和大辞典』の「泰」の字の意味の一つとして挙げられている易の六十四について見てみよう。『易経』の「泰」の字の説明は以下の通りである。

乾下　坤上　泰（地天泰）
泰、小往大來。吉亨。
彖曰、泰小往大來、吉亨、則是天地交而萬物通也。上下交而其志同也。

内陽而外陰、内健而外順、内君子而外小人。君子尊長、小人道桐也。
象曰、天地交泰。后以財成天地之道、輔相天地之酢、以左右民。*11

ここで注目をしたいのは、泰は天（乾）と地（坤）が交わり和して、万物が通ずるという点である。つまり、天と地が交わっている場所を「泰」とするならば、「泰」山はそのような場所であると言える。この易による泰の語義と泰山との結びつきが実際に中国の民衆の間でどのぐらい意識されてきたかは今後調べてみたいが、しかしながら、泰の字に天と地の接点という易の意義があることは重要である。

さて、次に「岱」の字について見てみよう。『大漢和大辞典』によれば、「岱」の字には幾つかの意味が当てられており、本論との関連で興味深いのは、「かわりあふ」ことと「はじめ」を指すという点である。前者は白虎通の巡狩から、「東方為岱宗者、言萬物更相代於東方也」という文を引用し、後者は後漢の応劭の『風俗通』の「山澤」から、「岱者、胎也、萬物之始。」という文を参照している。*12「胎」という字は、シャヴァンヌも述べているように、「胚胎、胎児」を指し示しており、生命の誕生の萌芽を示す語である。*13 また、泰山は「岱宗」とも呼ばれたが、泰山は五嶽の長であるから、尊・長の意味で「宗」の字があてられたという説明をしている。

更に興味深い点は、別に「岱雲」という語があり、これは泰山にかかる雲を意味し、天下に慈雨を降らすという。それは、五嶽の中心である泰山の雲は、石に触れて天下に慈雨を降らすからである。「萬物之始、陰陽交代。雲觸石而出、膚寸而合、不崇朝觸雨天下、其惟泰山乎。故為五嶽之長。」さらに、「岱斗」という字も併せて載せている。

このように中国史において見られる泰山に関わる語句を見ていくと幾つかの特徴が見えてくる。

まず、何よりも泰山は始源と密接に関わると認識されていることが分かる。それは泰山が陰陽が交叉する場であり、また、雲と石が交わり、雨を降らす空間でもあるという、泰山に付与された意義付けからも明らかである。場という点を強調するならば、天と地が交わる「場」であり、陰と陽が交叉する「場」であり、柔らかい「雲」と固い「石」が交わり「雨」を生み出し、それを上から下へと降らす「場」でもある。このように泰山という空間・場は相反するものが交わり合う極点であると言うことができる。

上記の考古学的遺跡と「泰」の字についての考察から言えることは、泰山の

考古学的図象には父系社会における太陽崇拝、男陽崇拝が背後にあったということである。この意味合いは「泰」の字の意味合い、つまり、陰と陽の結合という意味合いにまで継承されており、この意味では「泰山」という山に「泰」の字が当てられているのも最もなことと言える。また、このような前歴史的な背景から、父系社会に入って諸国が相争い合った末に中国全体を統一した秦の始皇帝が泰山で封禅を行なったということの意義がよく分かる。封禅の背後にあるコスモロジカルな観念との連続性を伺い知ることができるからである。

また、考古学上の資料の解釈の延長で、文献上でも泰山が死者の魂の赴くところとされていたことの理由が分かる。伊藤清司は文献上から泰山が冥界と考えられるようになったのは、前漢末から後漢の初め頃であると考えている。[*14] ここでは、また、死者の魂が赴くところは山頂ではなく、麓であったとしている点も興味深い。そのような場所として蒿里山（こうりさん）が挙げられているが、死と関連して捉えられる「聖なる山」の空間構造について考えさせられる。というのも、麓のその場所は死者の魂がおそらく泰山を通じて冥界に入っていく空間と見なされていたからである。山頂は、また、聖なる山の中でも別の意味合いを与えられていた空間であることが分かる。

このように考えると、聖なる山としての泰山は、全体として天空と大地との関係で考察すべき次元と、その山としての空間的構造内における別々の空間や場所の意味の考察が必要となってくることが分かる。そして、陰と陽が包摂される天空と大地の結合空間として、相対する諸要素が融合的に包摂される場所、そこから諸要素が生み出されるオリジナルな場所であることが分かる。このような点を考慮すると、なぜ、後の泰山宗教史で仏教の影響下、泰山の神が地獄と結びつけられるようになったのか、またそのずっと後に子授けの女神娘娘信仰へと展開していったのかが良く分かる。そして、これらの「人格」化された泰山の宗教的意義の背後、根底には、天と地の間に位置する山が持つ宗教的力と象徴的潜在性が、「もの」として現前する山そのものにあるからだということが明らかになってくる。

第二節　観光地としての泰山

平成12年に泰山の研究を始めるに当たって、当時勤めていた山口大学人文学部の中国学研究者数人に泰山に登ったことがあるかどうかを尋ねたところ、異口同音に、ケーブルカーで登りました、もう随分と観光化してしまっていますよ、という返事を受け取った。あんな所にはもう「宗教」なんか無いですよと

いうニュアンスであった。この返答から想定していたのは、泰山は「聖なる山」であったかもしれないが、今日は宗教的な動機からよりも、「観光」ないしは「娯楽」の要素をもって、泰山に来る人が多いのであろうということであった。

ここで一言、観光人類学について述べて起きたい。筆者は観光をテーマにして泰山に赴いたのではない。観光人類学は「観光」という事象そのものを取り上げ、その人類学的意義を考察する。例えば、山下は観光人類学の課題として、観光を生み出すしかけ、観光が観光客を受け入れる社会に与える影響、観光によって作り出される文化の三点を挙げているが、*15 筆者はこれらの観点は特に取り上げない。（図４）確かに、「観光」産業というものがなければ、容易に泰山に行くことなどはできなかったが、観光そのものが関心の的ではない。

さて、現地に行くと、実際、麓から中天門近くにあるケーブルカー乗り場までバスで行き、そこからケーブルカーに乗れば、苦労することなく、頂上まで辿り着くことができるのが分かる。筆者は二回とも麓から頂上まで徒歩で登ったが、徒歩で登りながら、かつてもっと登拝が困難であったであろうことを想像しつつ、これらの近代技術が一体何を変えたのであろうかと考えた。（図５）

これらの近代技術による手段は、巡礼地としての聖なる山へ赴く際の肉体的苦痛を取り除くという役割を果たしている。そうすることによって、山の麓から頂上までの中間の空間の意義を無化し、「頂上」という空間だけが「意義」あるものであると規定する。同時に、旅における「歩行」の意義、あるいは山であれば「登山」の意義が抹消されている。それは別の見方からするならば、巡礼などに伴う身体を用いることの意義を低くしている。（図６）

そして、その「頂上」で強調されるのは、その場所からの周囲の眺望であり、夜の星であり、日の出である。つまり、身体的苦痛を伴わずに、視覚的に非日常的な「景観」を「楽しむ」ということが、バスやケーブルカーを使って登山する目的とされている。

このようにバスとケーブルカーで頂上まで登ってくる人には中国人もいるが、海外からの旅行者も大勢いる。日本からの旅行者には山東省の他の名勝地青島や曲阜を回ってから泰山にくる人たちもいる。欧米からの旅行者は北京経由の場合もあるようだが、他の地域を回ってくる場合もある。しかし、ここで興味深いのは観光という形式において泰山にやってくる人々の泰山に関する知識の問題である。

中国人旅行者は中国史に関しての知識があり、泰山についても多く知っていると思われる。秦始皇帝の封禅に始まり、五嶽の長としての東嶽泰山、死後魂

が戻る山としての泰山など、中国文化と深く関係のある事柄を知っていると思われる。それに対して、海外からの旅行者に関して言えば、日本人旅行者は何らかの形で中国史に関する知識があり、説明される詩人の名前や皇帝の名前にも聞き覚えのあるものもあるだろうが、欧米からの旅行者の中にはほとんど中国史の知識も持たない人もいるようである。それゆえ、ここで「観光」としての泰山登山と言っても、泰山に登りに来る人々を区別する必要があると思われる。

また宗教的信仰という観点から言えば、日本人ならびに欧米人の旅行者の間で泰山の神への信仰を抱いて、宗教的理由で泰山にやってくる人はほとんどいないであろう。それに対して、中国人の間では道教一の名山と知りやってきたり、娘娘信仰を持ち、参拝しに来る人もいるだろう。あるいは、死後魂の帰る山ということで来る人もいるかもしれない。

しかしながら、泰山に登拝に来る人々の「観光化」という問題に関しては、次の点に注意する必要がある。過去泰山に登拝しに来た人々が「全員」、我々が期待するような篤い「信仰心」をもってやってきたと想定することはできないという点である。我々は過去を「ロマンティック」な期待を持って描き出す傾向がある。現代と同じように、過去のおいても、様々な理由で人々は泰山にやってきたと考える方が妥当性があるのではないであろうか。しかも同時に、多かれ少なかれ人々は泰山が何かしら「特別な」山であるということを受け入れた上で登拝に来ていた、そして、人々のその「特別さ」に対する態度は千差万別であったと見なす方が、単純に現代は「俗化」していると見なすよりは解釈上無理がないと思われる。

さて、歴史に関する知識という観点から泰山を麓から頂上まで徒歩で登る場合のことを考えてみよう。途中多くの史跡や逸話に因んだ場所がある。また、多くの石刻碑が建てられている。言うまでもなく、中国人の場合は聞いたことのある詩人や皇帝の名前を目にすれば、誰か分かるし、内容も分かる。また、日本人の場合は大部分がバスとケーブルカーで登拝するようであるが、麓から徒歩で登る場合もある。特に泰山には書の石刻が多くあるために、日本の書道をしている人たちは麓から歩きながら、泰山で見られる様々な書体について学びに来ることがある。ところが、中国の歴史や文化について何も知らない欧米からの旅行者が徒歩で登ろうとすると、石段が整備された坂道は必ずしも楽しいものではない。それゆえ、皆無というわけではないが、欧米からの旅行者が徒歩で登ることはあまりない。バスとケーブルカーで直接頂上まで登り、道観

を見たり、日の出を楽しむのが泰山を訪れる重要なポイントとなっている。

ここで観光地としての泰山を考えた場合、なぜ、日の出を見るのか、ということを取り上げてみたい。季節にもよるが、日の出を見るためには朝四時から五時の間に起きて、準備する必要がある。そのように早起きしたとしても、晴れて、透き通った日の出が見れるというわけではない。また、自然科学的にいうならば、太陽が昇るということは特に不思議な現象でもなく、ごく日常的に起きている出来事である。しかし、そのような現象を泰山の頂上から見るために、非日常的に早起きし、通常の生活空間では目にすることのできない仕方で夜明けを見るという経験が人々を魅了するという事実の意義は考えてもよいであろう。同時に、このような非日常的な行いが、「太陽信仰」の名残りであると強調しなくても良いであろう。

さて、泰山の地理上の特色の一つとして、中原のもっとも東に位置する高山であり、西の方から見ると泰山の上を越えて太陽が昇ってくるように見えるということが挙げられる。それは同時に泰山の頂上からは、何にも遮られずに日の出が見えることができるということを指す。実際、雲の無い天気の良い朝には、海上から太陽が昇るのが見えることがある。このように泰山の頂上から日の出を見るということの特別な意義が強調される。

それは海外からの旅行者を含めて、中国という特別な空間内におけるある一つの「特別な」現象として強調される。ここに自然科学的な説明を受け入れている者にとっても、泰山の頂上から見る日の出が「普通ではない」「特別の」日の出であると受け取られる。それゆえ、泰山頂上で見る日の出は特別な体験と識別され、それを見た人の記憶に鮮明に残ることになる。実際、筆者も始めて泰山に登拝し、日の出を見た時のことを今でも鮮明に覚えている。（図７）また、このように「自然」現象に焦点を当てることによって、中国の文化にそれほど馴染みの無い欧米からの旅行者にも泰山での経験が何かしら意義あるものとして記憶されることが期待されると言ってもよいであろう。これは泰山の「観光地」化を無批判に肯定的に受け入れている解釈であるという批判もあるかもしれないが、また、山頂の天街に宿泊所を作るなど、それこそ「俗化」以外の何ものでもないと否定的に見なすこともできるが、しかしながら、それにも拘わらず、日本を含めて海外からの旅行者がやってくるということ、泰山という山に様々な国から人々が来る理由について考える必要があると思われる。特に西嶽華山と比べると、泰山には様々な国から人々がやってきていることが分かる。華山は西安から高速道路を使って２時間近く離れたところにあり、ま

た麓には宿泊所も整備されていないという条件もあるだろうが、華山に登拝に行く人はほとんどが中国の人である。「観光地化」の違いと一笑することもできるが、しかしながら、華山でも泰山でも夜中に麓から登って頂上で日の出を見るという中国の人は多くいる。

確かに我々の日常生活は「自然科学」的説明で成り立ち、それを「本当の説明」として受け入れ、生活を送っている。「自然科学」的説明からするならば、泰山の頂上で見る日の出も他の場所で見る日の出も質的に異なるということはない。しかしながら、それが、たとえ観光化された説明によるものであったとしても、「泰山」の「頂上」から「見る」日の出という特殊性によって、この経験は特別な質を伴った経験とされる。そして、それが実際に日の出を見るという経験をする人にとって特別な出来事として受け止められる限り、それは現代的な世界において「特別な」印象ある経験になりうる可能性を秘めたものであると言える。

第三節　商業化と聖なる山

さて、泰山が観光化され、商業化されている事実は否定できない。それは登拝する人々がどのように受け止めるかという問題とともに、泰山の空間内で何が行われているかということとも関係してくる。

既に述べたように、バスとケーブルカーで泰山の頂上へ容易に行くことができる。登山に付きものの苦労・苦難が全く除去され、単に「見に来る」場所となっているという意味で「観光化」されていると言っても良いであろう。また、泰山の麓の泰安市では小規模な観光会社がたくさんできているということからも、「観光地化」していることは明らかであろう。

商業化について言うならば、泰山入山に当たって、入山料が取られるということが挙げられるかもしてない。しかし、五嶽の中でも泰山だけは明の時代から香料として入山料が科されていた。[*16] 泰山には、そのような慣行が昔からあったことが知られている。

また、頂上に天街と呼ばれる「商店街」があるのも、商業化と言ってもよいであろう。商店やホテルが山頂にあるのは期待した通りであるが、平成13年９月に二度目に登った時に頂上の道観碧霞宮の敷地内の建物の一角に「護符」や道教のお経のＣＤが販売されているのを見たときには、ここまで観光化、商業化がされたのか、雰囲気が台無しだと残念に思った。しかし、よく考えてみれば、このように思っているのは、泰山とは日常的に無関係な所で生活をしてい

る者であり、一方的に「泰山」という空間を「神秘化」し、「宗教性」を期待しているから、そのような感想を抱いてしまっているだけであるといえる。つまり、そこで試されているのは、単に泰山の「宗教性」だけではなく、そこを訪れる者が抱く「聖なる山」というものに付随する「期待された聖性」であると言っても良いであろう。

と同時に、商業化とは直接関係ないかもしれないが、職業としての道士についても考えなくてはならない。それは道教の道士の基本給は中国政府から出ているという点である。筆者はこの点について文献的に確認できなかったが、北京で道教寺院を回ったときの説明で同様の事を聞き、泰山でも案内してくれた人に聞いた時も同様の返事を受けたので、おそらく間違いではないと思う。政府からの基本給以外は、各寺院で経営努力することになっている。

この宗教と経済活動については興味深い問題が含まれている。しかも、それが「聖なる山」との関連で位置づけられる時、なおさらそうである。宗教活動を持続するには何らかの経済的基盤が必要であり、一概に否定することはできないが、宗教的言説は経済活動ないしは経済上の利益関心を隠蔽する道具にしか過ぎないという立場は、事態を単純化し過ぎている。また、人々は聖なる山としての泰山にやってきており、必ずしもそこにある道観に惹かれて来ているわけではないが、道中、至る所に道教寺院があるとすると、そこに立ち寄ってしまう。そして、そこで祀られている道教の神々や仏教の弥勒仏などに祈る際に、お金を払い祈祷を頼んだりするというのも「経済」的行為であるとすると、それは通常の物を購入するという意味で考えるだけでは十分ではないであろう。象徴的な交換と言ったところで、象徴という概念で隠されてしまう祈りの内面もある。それゆえ、金銭を通じての祈りといった事象の解釈には慎重になる必要がある。

また、同じ文脈で考えるべき問題として、「聖なる山」の山頂にある道観の敷地内の一角で「護符」や「読経」のＣＤが販売されるという形における「聖性」とは何なのであろうか、という問題がある。それは聖性の構造が変化しただけではないのか。あるいは元来、宗教的儀礼の返礼に何らかの金銭の授受が行なわれていたことを考え合わせれば、そのような宗教的儀礼が「読経」のＣＤという媒体に非人格化され、物質化されて、金銭との交換で「売買」されていると考えれば、必ずしも逸脱した行為とは言えないであろう。むしろ、行為者としての人間によって行なわれていた宗教的儀礼が、現代技術によって「製品」という「読経」のＣＤの物質化した非人格的形態を取り、しかも、それが

ある程度、人々によっても受容されていると考えることができる。すると、考えるべき点は、そのような現代的形態の宗教を受容している人々の宗教的あり方であり、またそれに呼応した道教のあり方と言ってもよいであろう。それゆえ、それを単に「世俗化」と呼ぶことも控えるべきであろう。

さて、「観光化」と関係のある問題が泰山に登拝に来る人々の振る舞いである。聖なる山としての「聖性」を考える際に、山そのものが持つ「聖性」とともに、そこを訪れる人々の振る舞いが作り出す「聖なる空間」の要素が重要である。ディヴィッド・カラスコが論じているように、人間の「聖なる」行為が空間を聖なる空間へと変容し、それによって聖なる時が成立する例もある。*17 それゆえ、「聖地」とされる空間でいかに人々が振る舞うのかという問題は、その空間の「聖性」を構成する上で重要な要素である。それは同時に、聖なる空間で一般に期待される行為、振る舞い、態度の価値判断がある。人々の振る舞い、動作からその場所の「聖性」を伺い知ることができる。例えば、泰山には途中数多くの道教の神々の像が祀られているが、その像に対していかなる態度、振る舞いを人々がするのかが、泰山という聖なる空間が「観光化」あるいは「世俗化」されたという判断を生み出す要因となる。実際、「信仰深く」振る舞う人もいれば、見た目にはほとんど「信仰心」を持ち合わせていないように振る舞う人もいる。このように行為の表相からその内面を推し量るというのは、実にある一つの解釈学的な前提があるからに他ならない。つまり、内面は行為という表現を通して、その内容・志向性を現すという前提である。

しかしここで問題が一つある。というのも、宗教性を心理的状態に見るという立場が果たして十分であるのかどうかという問題があるからである。確かに泰山に来て、道教の神々の前で祈っている人を見れば、その人は「信心」のある人だと思うし、そのような人がいる一方、同じ空間・敷地内でただ見て通り過ぎていく人を見れば、前者と較べて、「信心」のあまり無い人である、そのような人が来るのだから、この山は信仰の山としてよりも、観光の山になってしまっているのだ、という印象を持つであろう。つまり、実は行為の仕方しか見ていないのだけれども、それにも拘わらず、その「内面」を推し量って、世俗化した、観光化した、商業化したと価値判断を行っているのである。

さらにここで一つ思い出す必要があるのは、既に述べた通り、いわゆる「観光化」される以前の「巡礼」のロマン主義的な理想化の傾向が研究者自身にある場合である。それは過剰に過去の巡礼あるいは宗教的行為を「理想的」に「宗教的」であると郷愁を抱いてしまう危険性である。信仰心深い巡礼者とい

うイメージに凝集された形での「宗教的」あり方を理想的前提として、過去の宗教現象の担い手は全員そうであったかのように考え、自分が目にするものは「堕落し、形骸化したものであると」批判的に見なしてしまう傾向がある。

むしろ考えるべき点は、なぜ多くの人々が「泰山」に魅了されてやってくるのか、という問題である。「よく知られている山」だからであろうか。もし「よく知られている山」であるからというならば、なぜ、「よく知られている」のか、いかなる意味において「よく知られているのか」が問われなくてはならない。

第四節　宗教的空間としての泰山

上記のように泰山が観光化され商業化されているのは間違いない。しかしながら、それでも根底にあるのは泰山は宗教的な山であり、その山麓の内側は宗教的場・空間であるという点である。筆者が平成12年９月に登拝した折りには、麓から頂上まで荷物を背負って登山し、途中の全ての寺院にお参りしている母と娘の二人連れがいた。二人は訪れる寺院で真摯に熱心に祈りを捧げていた。同行してくれた中国人通訳者の説明で、祈りを捧げている言葉から、二人は青島から来、父親が病気になり、回復をお願いしているということが分かった。中国人通訳者の人は更に、泰山の神は本当に真摯に祈る人の願いを聞いてくれると人々の間で受け止められていると、説明を加えてくれた。

おそらくこのように真摯に祈るために泰山に登拝しにくる人の数は、今日では、全体から比べれば僅かなのかも知れない。しかしながら、基本的に泰山は宗教的山であるが故に、人々はやって来る。例えば、盤古神話では盤古が死んだ時、その頭は泰山になったとされるが、泰山の近くには、その盤古の横たわった頭とされる形の山がある。（図８）このように泰山は宗教的山であるが故に「観光」のためであってもやってくる人がいるという点を忘れることはできないであろう。

泰山が「観光化」される以前に泰山の研究を行ったフランス人研究者のエドアールド・シャヴァンヌの著作『泰山：中国の宗教民族誌』（1910年）には、十九世紀の泰山の写真が幾つか掲載されており、それらから当時の様子を伺うことができる。確かに現在からするならば、観光化されていないかもしれないが、そこに既に建物があるという点では、質と量の差はあるかもしれないが、実質的には異ならない。しかし、シャヴァンヌの研究からも分かるように、歴史的には泰山は国家祭祀と結びついているが、同時に民間信仰としての泰山信

仰も根強くあり、娘娘信仰などもあることは忘れることはできない。今日でも山頂にある木には石が置かれたり、赤い糸が結ばれており、人々の祈りがそこかしこに感じられる。（図９）しかし、ここでは民間信仰の側面には触れることはできない。また、別の機会に譲ることにしたい。

さて、宗教的空間、場所としての泰山についてもう少し考えてみよう。既に述べたが、泰山は「岱山」とも呼ばれていた。そして、泰山にかかる雲を「岱雲」と呼び、天下に慈雨を降らすという。泰山の石に雲が触れて、天下に慈雨を降らすからである。この説明に何かしらの「宗教的意味合い」が今日でもあるとしたら、同様の光景が今日でも見られるという点であろう。泰山の登拝の最中に雲が懸かってきて、岩が水に湿り始めるという様子を何度か目にした。雲が岩に衝突し、水を生み出すという古代の記述は現在でも目にすることができる。このように水が生み出される空間、場所という意味合いが、聖なる山としての泰山にはある。

「泰」の字そのものが水偏であり、楷書ではあたかも水が流れているように描かれるのは、示唆的である。

さて、次に泰山の岩について少し考えてみよう。かつて泰山の石が家に持ち帰られ、「護符」のように用いられていた。泰山の石にそのような宗教的力があると認められていたということだけではなく、「岩」が泰山の宗教的力をある一面で代表していたことが分かる。この泰山の岩に対する「宗教的」態度は、北京の人民広場にある人民英雄記念碑の土台の石が泰山から運ばれてきた岩であるということにも見られる。*[18]

現代中国の首都北京はかつての清朝の都の構造をある程度そのまま継承している。そして、現代中国が欧米ならび日本の植民地支配を脱し、内戦を経験して、多くの犠牲の上に現代中国が成立したという歴史的経緯を形に表した塔の土台が泰山から持ってきた岩であるという点に、泰山が現代において持つ意義を見て取ることができるであろう。

まず何よりも、その空間的意義が明らかである。現代中国を象徴する都市の中心部にある巨大な空間である人民広場の中でも人目を引く英雄記念碑、それは四方向の平面的空間と塔という垂直方向の空間の接点である。この場に据えられる土台の岩が持つ空間的意義は、ちょうど泰山が大地と天空の境界に位置し、天と地が交わる場であるという空間的意義とよく一致する。つまり、両者はともに天と地が交わる地点なのである。確かに違いはある。泰山は「自然」に形成された天空と大地の交差点であるのに対して、人民広場は政治的に社会

的に作り上げられた人工的に「創造」された空間である。

さらに興味深いのは、人民広場の人民英雄記念碑が戦死をした人々を記念し、記憶しておくための塔であるという点である。つまり、それは「死」という事象に関わるものであり、その塔に死者の魂が帰る山としての泰山から取られた石が用いられているといえる。ここに見られるのは、「死」という契機を通じて見られる中国人の一つの空間的「中心」、それは死者の魂が帰る場としての空間的「中心」であるが、そのような聖なる山としての泰山が、現代都市の「天空の下の広大」な広場の中核に「現前」しているという、この物質的事実が中国の歴史観における泰山の位置を示していると考えられる。

ここでいう歴史とは「事実」の年代記的記述ではなく、社会にとって意義あると受け止められる過去の出来事に関して語られる「物語」という意味においてである。つまり、現代中国社会成立にとって重要な歴史的出来事を記憶し、共有する都市の中心にある「天空の下の広大」な場に、一方では、現代の「非宗教的」とされる中国社会の成立を導いた民衆の「死」に関わる「歴史的」出来事と、他方では、古来から伝えられている死んだ中国人の魂が帰る山としての泰山との、異なる時間系列に属する歴史の記憶が交差している。それは、空間的には二つの「中心」が融合しているといえるのである。泰山の岩が英雄記念碑の土台に用いられているということによって。それゆえ、ここには人民広場の人民英雄記念碑の土台の岩が泰山から持ってこられた岩であるということを納得できる現代中国の人々の潜在的宗教的意識があるといえる。それは、おそらくおぼろげなものであろうし、また「宗教的」と意識されるものでもないであろう。しかしながら、このような事象から聖なる山としての「泰山」が、今日でも中国社会において持つ意義を見て取ることができる。

結び

聖なる山としての泰山について考えたことを簡単にまとめてみたが、歴史を通じて感じられるのは「山そのもの」が持つ力、現前性、存在力である。まさに「そこにある」というだけで人々に力を感じさせるものがある。そうであるからこそ、人々はそこに行って見たい、その「場」にいたいと願う。巡礼であれ、旅行であれ、そこに赴こうと思うのであろう。泰山の場合は幾重にも重なった歴史の記憶がその聖性を特徴づけているが、それらの「伝承」を聞いたことがある人々は現地に赴き、そして、なぜ皇帝が泰山をそれほどまでに重視したのかを感じ取ることになる。歴史の追体験を行うとともに、かつて詩人達が讃

えた、その美的景観を自ずから目にし、詩の言葉と眼前に広がる風景とを了解する。それゆえ、聖なる山としての泰山について考察しようとするならば、狭義的な意味における宗教や信仰といった言葉を通じてだけでは、十分に理解できないということができよう。

泰山に赴き、中国宗教史における聖なる山の意義についての研究を行ったが、同時に日本宗教史における泰山の影響についても知ることができた。例えば、泰山の神、泰山府君は陰陽道の最高神であり、土御門家が暦を司った平安時代から江戸時代の末まで、泰山の神は隠れて重要な意義を持っていたことが分かった。また、今日でも福井県にある土御門神道神社では泰山の神泰山元君が祀られており、その神格は、日本に泰山の信仰が伝わった時の姿をある程度継承している。、それは中国において、泰山の神格が多様に変遷したことを考えると大変興味深い事例であると思われる。また、仏教化された形においてではあるが、空海が恵可和尚から譲り受けたとされる真言曼陀羅は、当時の中国の宗教的世界を網羅しており、よく見ると泰山の神が描き出されている。このように表面に現れない形で日本宗教史にも泰山が関係していたということは、本研究の副産物であったと思う。

＊1　『古老的泰山』（新世界出版社、1987年）の著者李継生氏と話す機会があった。李氏は泰山近くで生まれ育ち、泰山に数え切れないほど登拝した。その研究生活は泰山に捧げられていると言っても良いと思う。李氏のような研究者を前にして、中国学の専門家でもない筆者が泰山について何かを書くということは、全く恥ずかしいことでもある。

＊2　例えば、中国で出版されている泰山観光ガイドに類するものには、泰山にある名勝地を説明しているものが多数ある。泰安市新聞出版局発行の『泰山名胜游』には泰山にある各名勝地が簡潔に説明されている。また、清の聂剣光の『泰山道里記』にも当時の泰山登拝の道里が描かれている。

＊3　路宗元編著『文化泰山』泰安市新聞出版局、１頁。

＊4　刘慧『泰山宗教研究』文物出版社　３－４頁。

＊5　靳之林、岡田陽一訳、『中国の生命の樹』言叢社、1998年、84頁。

＊6　同上、85頁。

＊7　諸橋耳轍次、『大漢和辞典』巻六、1075頁。

＊8　１）おほきい。極めて大きい。２）ゆたか。３）やすらか。４）安らか

にのびのびしていること。5）ゆるやか。6）とほる。7）おごる。8）なめらか。9）はなはだ。10）泰元は点。11）太極。12）易の六十四。13）酒樽。14）大に通ず。15）太に同じ。16）古、亾に作る。17）汰、汰に同じ。18）忕に通ず、などがある。

＊9　同上、1074－75頁。

＊10 「泰山」五嶽の一。山東省泰安県の北。舜典に、東巡して　山に至るとあるを始めとし、その名は経書にもしばしば見える。秦の始皇帝は天下を統一して地方を巡狩し、泰山に至って碑を立て、漢の武帝も此に封禅す。清代には康熙帝が此に登り、頂に亭を建てて普照乾坤の額を揚げる等、古来天子の祀るべき聖山として仰がれる。

「泰山吟」とは人が死すればその精魂が泰山に帰るを歌う。

「泰山治鬼」泰山の神が人の魂魄を治めるということ。その説は後漢に始まる。

「泰山府君」泰山の神。人の生死を掌る。

「泰山頽梁木折」衆山の仰ぐ泰山が頽れ、衆木の依る梁木が折れる。孔子が己の死を予知して歌った言葉。

「泰初」気の初め。宇宙の原始。

「泰折」地を祀る壇。北郊にある。

「泰壇」天を祀る壇。南郊にある。

「泰逢」山海経に見える獣神の名。人面虎尾、蒼玉を司り、天地の気を動かして雲雨を興す。

＊11　高田真治、後藤基巳訳、『易経』（上）、岩波文庫、156－161頁。高田の下し文は以下の通りである。

泰は小往き大来る。吉にして亨る。

彖に曰く、泰は小往き大来る、吉にして亨るとは、則ち是れ天地交はりて万物通ずるなり。上下交はりて其の志同じきなり。内陽にして外陰なり、内健にして外順なり、内君子にして外小人なり、君子道長じて、小人道消するなり。／象に曰く、天地交はるは泰なり。后以て天地の道を財成し、天地の宜を輔相し、以て民を左け右く。

＊12 『大漢和大辞典』巻四、二三七頁。

＊13　Edouard Chavannes, *Le T'ai Chan: Essai de Monographie d'un culte chinois* (Paris: Ernest Leroux, Editeur, 1910), Reprinted by Ch'en Wen Publishing Co., Taipei, 1970, ff. 319-320.

＊14　伊藤清司、『死者の棲む楽園、古代中国の死生観』、角川書店、平成10年、

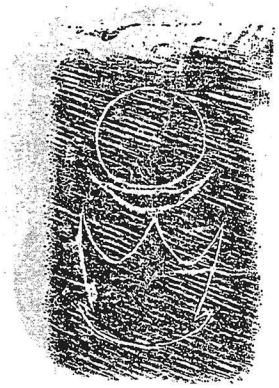
33頁。

＊15　山下晋司、「観光人類学案内」、山下晋司編『観光人類学』新曜社、1996年。7－11頁。

＊16　澤田瑞穂、「泰山香税考」、『中国の民間信仰』、工作舎、東京、一九八二年、二九八－三一六頁。

＊17　David Carrasco, *To Change Place: Aztec Ceremonial Landscape*, (University Press of Colorado, 1991).

＊18　VCD「中華泰山」（斉魯音像出版社）



（図１）山東省大紋口文化遺跡出土

（図２）山東省大紋口文化遺跡出土

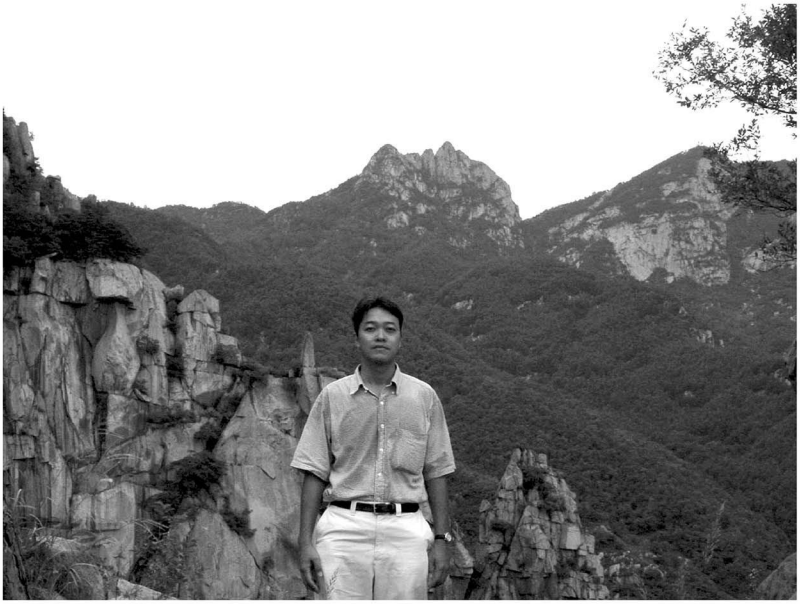
（図３）泰山

（図４）泰安市での封禅のパフォーマンス

（図５）泰山登拝の入口ー天門の前

（図６）南天門に至る石階段

（図７）泰山山頂からの日の出



（図８）盤古の横たわった頭とされる形の山

（図９）泰山山頂の木の枝に載せられている小岩と赤い紐
（この写真ではよく分からないが）